

水戸藩家老、失脚の真相は

結城寅寿 子孫と識者に聞く

今年水戸藩家老の結城寅寿誕生200年。9代藩主斉昭に才能を認められ、25歳の若さで家老に抜てきされた寅寿だが、斉昭の怒りを買い失脚。寅寿はなぜ39歳の若さで処刑されたのか。結城寅寿子孫の結城明姫氏と具現現代史研究会長の市村真一氏（常磐短期大学特任教授）に聞いた。



結城明姫氏



市村真一氏

寅寿だけ処刑されなかったため、斉昭は寅寿が幕府と結託したと思い、間もなく失脚させられる。

寅寿を許せない斉昭が寅寿の家人を寝返らせた。

結城寅寿が斉昭に登用され、失脚した経緯は。

市村氏「寅寿は保守派名門の家に生まれ、幼少より学問、馬術などに優れ、斉昭の目に留まり、25歳で家老に抜てきされた。改革派が主流の中、保守派には希望の星だったと思ふ。しかし幕府が斉昭はじめ、改革派を天保の改革の行き過ぎを理由に処刑した際、

時、腕の立つ藩士を警護役として同行させたが、その藩士に斉昭が死した書簡も見つかり、県立歴史館で展示された」

処刑については切腹や斬首など諸説ある。

市村氏「水戸藩の公的見解は死刑を申し渡す目付が寅寿の幽閉されていた長倉松平家に到着し、罪状を読み上げている最中に自刃したというも。ただ、その目付が明治になって『水戸史談』に語ったことは違ふ。寅寿は座っていたが、両手を膝に乗せたまふ、後さとりし始め、背後にいた松平家の介錯人が首をはねた。さらに、松平家の下人は後に目付の話は事実ではなく、本当は寅寿が『執政を務めた者に何の糾明もなく』と叫んだのが聞こえ、ドタバタ音が出た後に静かになり、目付が出てくると、しゃべったら殺すと脅され、きょうまで黙ってきた、と明かした。寅寿は罪状に異議を唱えようと抵抗したところを惨殺されたとみるのが自然だ」

斉昭の謀略について。

結城氏「藩主自ら内偵行為を指示していたことは寅寿に對しての斉昭の激憤を感じ、印象に残った。裏を返せばそこまで強い怒りを持つほどに寅寿を信頼していたのだなと、どこかやるせない気持ちとなった。個人的心情としては、藩主でありながらその怒りを密書という形で遂行せざるを得なかったその時代の斉昭の孤独や状況も、斉昭との確執はあれども明確な証拠なく殺されざるを得なかった寅寿の状況も、双方とも同情を禁じえないと感じる」

結城家は寅寿処刑後、どうなったのか。

結城氏「長男の一万丸は獄死、娘の美智が大森家から婿養子を取り、家を復興させた。その後天狗党の追討が激しくなるに婿の七之助は諸生党として新潟で戦死、寅寿のめかけ・なみが美智と娘のちよを連れて那須塩原まで命からがら逃げたという。途中で追っ手に見つかつたものの追っ手が以前美智の婚約者だった男

で、見逃してもらえたという口伝も残っており、逃したの緊張を想像させる」

斉昭謀略に對しては。

市村氏「斉昭は寅寿の謀反が許せず謀略に走ったと思うが、10年以上処刑できなかったのは藤田東湖の反対もあったことは確か。不法なおとり捜査であり、それを理由に処罰することは謀略が明らかになるため、できなかったと思う」

結城氏「斉昭と寅寿が蜜月であつたことも、斉昭失脚の真相が不明なことも、贅居させられた寅寿が復権の謀略を行ったことも、斉昭が謀略に對してそれを暴いたことも、罪状が不明なままに寅寿が処刑されたことも、それぞれが史実。勝者敗者によりゆがめられぬ中立的な歴史観を当事者自らから学べる対立勢力のトップの在り方、状況分析の重要性や議論の透明性、危機管理の視点などを読み取っていくのが、これからの時代必要なのではないか」